

二代目市川団十郎日記詳解 — 享保十九年二月 —

ビュールク トーヴェ*

はじめに

享保期江戸歌舞伎の中心的人物である二代目市川団十郎（元禄元（一六八八）年〜宝暦八（一七五八）年）が残した日記諸本の成立や特徴、注釈書の概要、そして本詳解の意図については拙稿「二代目市川団十郎日記詳解―享保十八年十二月〜十九年一月―」（『埼玉大学紀要 教養学部』第五二巻（第二号）、以下「詳解1」と略す）に詳述した。ここでは写本・注釈書一覧及び凡例のみを記す。

凡例

- 一、記号▽○●△▼は原本を示す。
- 二、注釈書からの引用は、書名をへ〜で示し、引用文を「」で示した。
- 三、「」のない注釈は筆者による。
- 四、日記本文中の数字は注の番号を示す。
- 五、引用文の約物は省略した。
- 六、出典の記載がない役者評判記は『歌舞伎評判記集成』（岩波書店、一九七二年〜一九七七年刊）から引用した。

写本一覧

- 「老のたのしみ」（▽）
- 「柿表紙」（○）
- 「栢筵日記」（●）
- 「病中日記」（△）
- 「市川団十郎日記発句集」（▼）

注釈書一覧

- 「老のたのしみ」
- 岩本活東子注「老のたのしみ抄」（『燕石十種』文久元（一八六二）年編、市島謙吉活字編明治三十九年（新版中央口論社、一九八〇年刊）（『岩内藤耻叟・小宮山綏介注「老の楽」』『温知叢書』博文館蔵、明治二十四年刊）（内）
- 博文館編輯局校訂「老の楽」（『校訂俳優全集』博文館、明治三十四年刊）（博）
- 郡司正勝註「老のたのしみ抄」（『近世芸道論』日本思想体系（六一）、岩波書店、一九七二年刊）（郡）
- 「柿表紙」

*ビュールク トーヴェ

埼玉大学大学院人文社会科学部研究科准教授、日本近世文学、演劇（歌舞伎）

伊原青々園注「柿表紙」『栢筵遺筆集』、大正六年写、早稲田大学演劇博物館蔵）〈伊栢〉

「栢筵日記」

伊原青々園注「栢筵日記」『栢筵遺筆集』、大正六年写、早稲田大学演劇博物館蔵）〈伊栢〉

享保十九年二月

【日記】

○十日 夜湖萍殿^①へ行 何江^② 番虎^③ 予夜明ル

【注】

(1) **湖萍殿**〈伊栢〉（同年二月二十三日注）「其角門人、深川湖十、

元文三年七月二十七日死卒、朱星、一柳老胤軒、湖萍」。深川湖十は代々江戸座という俳諧グループの中心人物であり、初代は延宝五（一六七七）年〜元文三（二七三八）年。はじめ鼠肝、のち榎本其角にまなぶ。十三年間京坂を漂泊。其角の没後、点印をうけついで其角座を主宰。享保十八年に湖十の名前を養子永機に譲り、隠居した。本姓は森部。別号に木者庵、老鼠肝、其角堂など。編著に『二のきれ』『俳太郎』など『日本人名事典』。

(2) **何江**〈内〉「市村羽左右衛門」（「詳解1」同年一月二十七日参照）

(3) **番虎**〈伊栢〉「嵐三右衛門」（「詳解1」同年一月六日参照）

【解説】

享保十九年二月十日、二代目団十郎は八代目市村羽右衛門、三代目嵐三右衛門らとともに江戸座の中心的点者・初代深川湖十の屋敷に招かれ、朝まで過ごした。二代目湖十は享保十八年十月、二代目団十郎、妻お才、養子升五郎ら（後に三代目団十郎）とともに箱根温泉巡り（其角編『新家家』〔貞享三（一六八六）年刊〕を元に）、俳書『犬新家家』（『資料集成二世市川團十郎』収録、〈和泉書院、一九八八年〉）を編んだことなどから、二代目団十郎家と湖十家に親しかったことがわかる。なお、二代目湖十の家は二代目団十郎の家の隣だったが、初代湖十の住所は未詳。

【日記】

○享保十九年二月十二日

初午^① ヤカワラケ売^② ノカケエボシ^③ 才牛

初午や水クミ^④ 諷フ^⑤ 朝南 同

豊年ノ、(▼や)瑞々^⑥ ト梅ノ楮^⑦ カナ

【注】

(1) **初午** 二月初めの午の日。稲荷の祭日とされ、稲荷講の行事が行われる。

(2) **カワラケ売** 土器売り、土器を売り歩くこと。また、その人。

孟蘭盆の灯籠用または、土器投げに用いる土器などを売り歩いた。なお、土器とは「素焼きの陶器」「酒を飲む器」「酒盛り」「陰部に毛がはえない女性」という意味もある『日本国語大辞典』。

(3) **カケエボシ** 掛緒を用いないで頭に押し入れて、うしろの針だ

けでとめておく折烏帽子。打懸烏帽子『日本国語大辞典』。

(4)

水クミ 水くみ、水をくみ取ること。また、その人。江戸時代、

河川や井戸などから水をくみ取り町へ売り歩いた。さらに、歌舞伎の小道具の一つ。黒木綿で作った蒲鉾形の烏帽子。従者・雑兵の役に用いる『日本国語大辞典』。

(5)

諷フ うたう。節をつけてとなえる。遠回しに言う『日本国語大辞典』。諷歌とは思いを表面に現わさず他の事にことよせて歌った歌。特に、「古今集」で、和歌の六義の一つ。「詩経」の六義の一つの風（ふう）になぞらえたもの。

(6)

瑞々 みずみず。しつこくないさま、あつさりとしたさまを表わす。また、つやがあつて新鮮なさま、若々しいさま。みんずり『日本国語大辞典』。

(7)

桤 すはえ、すばえ。木の枝や幹からまつすぐに生え伸びた若枝『全文全訳古語辞典』。

【解説】

初午の豊年句。二月最初の午の日に町歩く土器売りと歌舞伎のやつし事として演じられる物売りの芸がかけられているであろう。同年二月二十三日（○）記録参照。

【日記】

○十八日より二番目詰出ス 又オモハシカラズ 三右衛門琴ヲヒキ其間ニ徳弁^①大字ヲ書^②琴ハヨクヒキ狂言モ予ガ目ニハヨク思ヘトモ一休作意ナク初心ニ見ユル故評判モヨクナキ歟 殊ニ声ヨハク早クチ也

【注】

(1)

徳弁「伊柿」養子升五郎、後三世団十郎「享保六（一七二二）年」寛保二（一七四二）年。『市川栢庭舎事録』では「然るに海老蔵妻もろともに子なき事をかなしみ色々ねかへ共出生一人もなし 其折柄三升屋助十郎といへる立役十郎役を勤れは海老蔵五郎の役をつとめ実に兄弟のことく不断念頃他事なし 此助十郎に男子一人女子二人有り 此男子を海老蔵子に貰 市川団十郎を名乗らせ則市村羽左衛門何江か娘お兼を嫁にもらひ祝言いたせしなり」とある。

(2)

大字ヲ書 大きな字を書く遊芸。また、その筆者『日本国語大辞典』。

【解説】

「七種繁曾我」（ななくさにぎわいそが）の二番目の詰として二月十八日から、三代目嵐三右衛門が琴を演奏し、三代目市川団十郎が書道を見せる場面が取り入れられた。二代目団十郎は琴の演出はいいと思っていたが、三右衛門は初心者に見え、不評だった。三右衛門のセリフ術が原因だったという。

琴を演奏する姿は役者評判記『養張草』（元禄四（一六九一）年刊、方松本平蔵評、『雨夜三盃機嫌』（元禄六（一六九三）年正月、女方澤村小伝次評、女方松本平蔵評）、『役者略請状』（元禄十四（一七〇一）年三月、「持統天王都移」（元禄十四年春、市村座）「水木染之助 天人おとめ初は天人姿後（うはぎ）」の挿絵に描かれている。近松門左衛門作「傾城仏ヶ原」（元禄十二（一六九九）年正月、京・藤十郎座）についても「又

当年もけいせいおうしうとあふがれ給ひ、ねびきとなつて、おくずまゐ、つまとけたかく、せうじの内にてかきならし給ふ琴のねは、夜ふけての、すりばちのおとにおなじく、内がこひしう、しのばしき物にては有ぞ、ことさらに一ふしの小哥をきいては、いかなるあらゑびすもころりとなつて、」《役者口三味線》〈元禄十二年三月刊〉、女方岩井左源太評とあり、琴の演奏の場面があつたようだ。

多くの場合、若女方が琴を演奏していたようだが、「千本大念仏」（宝永四（一七〇七）年春、亀屋座）、では立役者澤村長十郎も演じた《役者友吟味》宝永四年三月刊挿絵参照）ので、嵐三右衛門はこうした上方風の立役の演技を踏まえた可能性がある。

一方、書道の場面は役者評判記『野郎虫』（万治三（一六六〇）年四月刊）『養張草』（元禄四（一六九一）年刊、近松勘様評）『雨夜三盆機嫌』（元禄六（一六九三）年正月、女方上村井簡評）、『古今四場居色競百人一首』（元禄六（一六九三）年正月、立役玉井権八評、女方松本こさらし評）、『役者舞扇』（元禄十七（一七〇五）年四月刊、「源氏六十帖」元禄十七年春、市村座）などの挿絵に見られる。

初代団十郎作「成田山分身不動」（元禄十六（一七〇三）年四月、森田座）の第五段は、空海が文殊菩薩と書道で争つたという伝説を元にした。やがて空海が唐から日本に戻り、朝廷を訪れると荒海の景色が描いた障子に「龍」という字を書き、「鬼澄見て『いや此龍の字点がない』『如何にも不審尤なり。さりながら点を打てば、大内山忽ち洪水漲る故、扨こそ点を打たぬなり。いで／＼点を打たん』とて九歳代三若松所作弟子台丸鬼形丸とて、二人の美少年諸共に祈誓しければ、不思議や龍といふ字消えければ、忽ち毒蛇となり、鬼澄をひつくはへ、虚空にこそ失せにけり」と書道の力で悪人を退治する。

（図1）絵入狂言本『成田山分身不動』（元禄十六年四月刊、国立国会図書館デジタルコレクション）



書道の場面は多くは若衆役者が演じた。「成田山分身不動」で空海を演じたのは十六歳の二代目団十郎だった。享保十九年二月、「七種繁曾我」の詰で大文字を書いた三代目団十郎は同じく十四歳の若衆だった。同年六月十日に「白翁ヨリ返事二短冊四枚服紗二ツ来モ 予ガ発句 フクサハ徳弁手ヲ望ミ也」（○）とあり、俳人田中千梅（貞享三（一六八六）年、明和六（一七六九）年、別称：白翁）は三代目団十郎が書いたものを所望する。また、同年八月二十六日、二代目団十郎は子供の頃の手習の師匠岡佐次兵衛（別称：休息）と再会し「升五郎大文字書休息殿へ遣

ス」(〇)とあることから、三代目団十郎は書道に優れたと考えられる。

【日記】

○十九日 早朝ニ亡父ノ廟參帰テ^① 其日番虎 公^②家衆ノ画賛一枚予にクル、芝山兵部ノ少重豊殿^③ノヨシ 其日母人モ目黒ヨリギゲンヨク寺参リ 此方ヨリハ伯母^④御女共参ル

【注】

(1) 早朝ニ亡父ノ廟參帰テ(伊柿)「元祖命日也」芝・僧正寺内常照院に墓あつた。

(2) 公(伊柿)「高力」

(3) 芝山兵部ノ少重豊殿 芝山兵部ノ少(〓若旦那)重豊殿。芝山重豊、江戸時代中期の公卿。元禄十六(一七〇三)年〓明和三(一七六六)年、高丘季起の次男、芝山広豊の養子。正二位、権中納言。宝暦八年、尊王派の神道家竹内式部が幕府に捕らえられた宝暦事件にかかわりがあつたが、罪はまぬかれる『日本人名事典』。多田南嶺に和歌をおしえた。『妙法院日次記』がある。

(4) 伯母(伊柿)「(深川に伯母の抱せし事後に見る)河原崎の人か」河原崎権十郎は江戸初期の座元、木挽町で河原崎座を経営していたが、寛文三(一六六三)年に森田座と合流した『歌舞伎事典』。享保二十年三月、森田座の控え櫓として復活し、以降団十郎家と深い関係を持ちつづけた。

【解説】

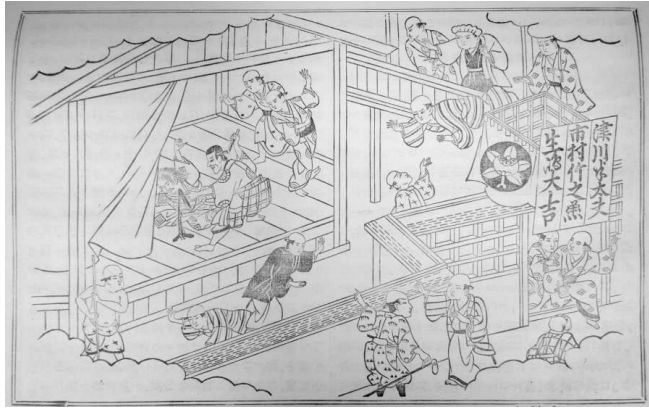
初代団十郎の没後三十回忌であつたため、二代目団十郎、目黒で暮らしていた二代目団十郎の母(「詳解1」正月六日参照)そして伯母が芝・僧正寺内常照院に参詣する。また、三代目嵐三右衛門に芝山兵部重豊作画賛をもらう。

初代団十郎は元禄十七年二月十九日、「移徙十二段」上演中市村座で生島半六に刺殺されたとされる。事件について諸説がある。

事件の翌年に刊行された浮世草子『宝永忠信物語』(錦繡堂著、改題『正徳追善曾我』(正徳六年刊)、『新群書類従』第三巻収録)では事件を目撃証言として劇場風景について次のように記されている。

見物の貴賤、鼠木戸を猫脊に成て押破り、缺出、年寄たるものは、棧敷よりつき落され、女童子は、踏たをされ、茶弁当の湯にて身を焼、火縄の火焼指にて、羽織著物のすそをこがし、螢なんどの飛に人しく、飛ありく有様、興覚て何事と問ども、其分知たる人なし、かゝる処へ三十歳計成男、かい〓しく見えにしが、月行持と言者にや、金棒をかまひそしく、挽来る彼を招て、ひそかにいか成故ぞと問ければ、彼者申様は、意越の次第は未知れず候得ども、楽屋にて市川の団十郎を生嶋半六指ころして候と語捨て、いそがしく行ぬ事件当時の大混乱が目の前に浮かぶようであり、続いて半六が初代団十郎の演技に勝てなかつた悔しさで刺したとしている。文章では初代団十郎が楽屋で殺されたとしているが挿絵には舞台上で殺される。伊原青々園はここに描かれた衣装から、演目内容は「不破判左衛門」と推測している(『市川團十郎の代々』近世文芸研究資料、第二期芸能編12、一九九七年刊)。

〔図2〕『正徳追善會我』〔正徳六年刊〕『新群書類従』第三卷



講釈師馬場文耕は事件について次のようにまとめる『江戸著門集』宝暦七（一七五七）年刊〕

此才牛は、世上一統に知る処、元禄の始め、市村座にて、狂言の折から横死をとげたり。其仔細を尋ぬるに、杉山半六と言へる役者、何やら才牛を恨める事ありと見え、真剣をひそかに隠し持ち、不意に刺殺したり。是ふしぎの大変、以の外周章せし事なり。其後公儀へ、半六召捕へられて、御詮議有りけれども、唯恨ありて候とばかりにて、何の白状にも及ばず、御答は御制法の通り、半六解死人と成り、御仕置相済みけり。

「恨みあり候とばかり」という発言は赤穂事件を起こした浅野内匠頭が江戸城の松の廊下で吉良上野介を切ろうとしたが、その理由として「遺恨ある候」としたということを思わせる。馬場文耕はさらに恨みの真の原因として、初代団十郎が半六の不倫をやめさせようとしていたからだとしている。馬場文耕は元禄十七年に起きた事件を元禄初期に起きたものとしているので、本書は歴史資料として信憑性にかける。

もう一説は天明文化期に活躍した狂歌師東随舎著の随筆『古今雑談思出草』（天保十一年成立、『日本随筆大成』第三期第四巻収録）にある。東随舎も初代団十郎は杉山半六に殺されたとしている。ここでは半六は楽屋の管理している頭取であり、自分の息子の嫁と密通して初代団十郎に咎められ、密通事件を次の演目の題材とされたため殺したとしている。昼時頃、団十郎が花道より出て、正面にて白眼居る処、俄に大雨降出れば、仮小屋の芝居舞台、所々雨もり強し。この時、楽屋より半六合羽を持来り、衣装のぬるゝなりと後ろより打掛ながら、氷の如き脇ざしを団十郎が横腹へつき立、力に任せて多ぐりけるに、なにかもつてたまるべき。其儘、息はたへ果たちとかや。一説に、狂言の仕組太刀打処、又引と見せて真剣をもつて害せし故、見物は狂言にて殺すと心得居たりといふは非なり。

このように近世期を通してさまざまな事件についての説が流布したが、真実はわからない。「杉山半六」は役者評判記に見たらないが、伊原青々園によれば半六の本名で、生島新五郎の門人となった時から「生島」と名乗ったという『市川團十郎の代々』近世文芸研究資料、第二期芸能編12、一九九七年刊）。

役者評判記『役者舞扇子』（元禄十七年四月刊）では「生島半六」を「中ノ上」の立役者としているが、同年秋に刊行された評判記『大尽三つ盃』

には「白字岡右衛門半六兩人はきへし身のおもかげ残る姿也」とあることから、歌舞伎の世界から去ったということがわかる。

初代団十郎が刺し殺された三十年後の二月十九日に二代目団十郎が墓があつた常照院に参詣する。八代目団十郎まで、団十郎家の墓は増上寺内常照院にあつた。境内には七代目団十郎が寄進した石の水鉢などが残る。九代目団十郎は明治期に流行る神徒として青山墓地へ移動する。

二代目団十郎の伯母について、伯母は河原崎座の關係者だったという説（伊柿）を裏付ける資料がないが、享保十九年八月から翌年三月にかけて河原崎長十郎が森田座の控え櫓としての河原崎座を成立させる挑戦した際の二代目団十郎の関与が伺える（▽○○●）。天保期、九代目団十郎が河原崎長十郎を名乗ったことから、団十郎家と河原崎座の親しい関係があつたことがわかる。

二代目団十郎は嵐三右衛門から貴重な画賛をもらう。日記には美術品について百五十一ヶ所、稀購本について七十ヶ所記述がある。『市川栢庭舎事録』には「扱毎年書物虫干とて蔵より取出し自身指図を以て申付干けるに殊之外人歩の掛りし事也 先歌書一通り其外源氏六十帖 扱誹書物 扱唐軍和軍書と漢の珍書絵本絵双紙絵其外の書物等 中々筆に尽かたき程の書物也」とあり、古書のコレクターだったようだ。

【日記】

○廿三日 湖萍^①梅屋敷^②へ奉納勸進^③ 右ニ書シ豊年ノ発句^④句也 湖十^⑤へ渡ス

【注】

(1) 湖萍 同年二月十日記録参照。

(2) 梅屋敷 武州荏原郡蒲田村（現在・東京都大田区）にあつた梅

見の名所。後に歌川広重の「名所江戸百景」に描かれる（『日本歴史地名体系 東京都の地名』）。

(3) 勸進 出家姿で物をもらつて歩くこと。また、その人や、そのもらう物。転じて、単に施しを受けたり、物乞いをしたりする場合にもいう（『日本国語大辞典』）。

(4) 豊年ノ発句 同年九年二月十二日記録参照。

(5) 湖十（伊柿）「深川湖十隣家なるし事後にあり」二代目深川湖十（？）延享三（一七四六）年、甲斐（山梨県）の人。初代湖十の養子となり、享保十八（一七三三）年二代をつぐ。其角座の中心人物として活躍。本姓は村瀬。別号に永機、巽窓、巽離斎、歌舞庵など。編著に『犬新山家』『ふるすだれ』など（『日本人名事典』）。

【解説】

団十郎家と湖十家の親交については、同年二月十日記録の解説参照。

この日、初代深川湖十が蒲田村の梅屋敷を訪れ、勸進として発句を奉納すると、二代目団十郎が二月十二日に作つた豊年の発句、「豊年ノ瑞々ト梅ノ楯力ナ」を隣に住んでいた二代目湖十に渡したということは、おそらく一緒に奉納するためであろう。

梅屋敷は蒲田村に二箇所あつた。『遊歴雑記』（大浄著、文化十一（一八一四）年序、『江戸叢書』収録）下・二十七「蒲田村新古両所の梅見再遊」ではまず文化期に流行していた、歌川広重の「名所江戸百景」にも描かれた和分散忠左右衛門の庭が紹介されるが、それから「明神の森より左へきれて、農夫助左衛門が屋敷に至る、園中広き事二町四方余、や

しきの真中に家居して東向に住えり、園中林檎梨の樹も見ゆれど、屋敷の四方梅樹なざる事なく、各古木にしてみな三四間へはびこり、古来武州の梅屋敷といひしは、此助左衛門が園中なりしを、有徳君臥龍樹を預け賜ひしより、本所清香菴を梅やしきとよび」とある。ここで現れる「有徳君」は八代將軍吉宗（別称有徳院）を指しているの、享保十九年の梅屋敷は後者の助左衛門の花園だったのだろう。助左衛門家の老婆えいらくは茶の湯の名人で風流人として有名だったらしい。旅人がその辺に俳諧の会も行っていると聞いたら、えいらくが「二代目の川柳、此村に縁者ありて屢来り、一二夜づゝ止宿してより以来、江戸座の俳諧ざれ句など天行候よしいふにぞ、しからば川柳風の発句しまいらんと、短冊にしたゝめ遣はしけるは、人の笑草ならん、『梅咲や隠居そろ／＼うこき出し』以風」と答えた。梅屋敷周辺は風流の遊びができる場所として有名で、江戸の俳人にとって所縁の場所でもあったようだ。

【日記】

▽二月中旬頃より行徳浦^①へ鯨式本寄る江戸より見物群集なす わけて廿四日おひたしく鯨見物のよし しかも其日は彼岸の中日也 但廿日歟 よみ売^②に廿日として出す 今年山姥の子をうみ^③ 又八つ子の伯父へ異見^④ 狐の女郎買^⑤ 色々去年より世説にて狂言に仕組

【注】

- (1) 行徳浦〈郡〉『武江年表』に『二月二十日、行徳高谷村の浜鯨二つ流寄る。五尋二尺。両国橋辺広場に出して看せ物とす』とある

(2) よみ売 狂言絵本の販売か。

(3) 山姥の子をうみ 坂田金時が山姥に育てられた説を元にした筋。

(4) 八つ子の伯父へ異見〈伊柿〉「八歳」〈郡〉「初子か。八歳の子か」

(5) 狐の女郎買〈郡〉「狐の女郎買。……これは其頃吉原にて狐が女郎買に来たり、小判が木の葉なりしという風説を元とせしなり

（歌舞伎年表）」

【解説】

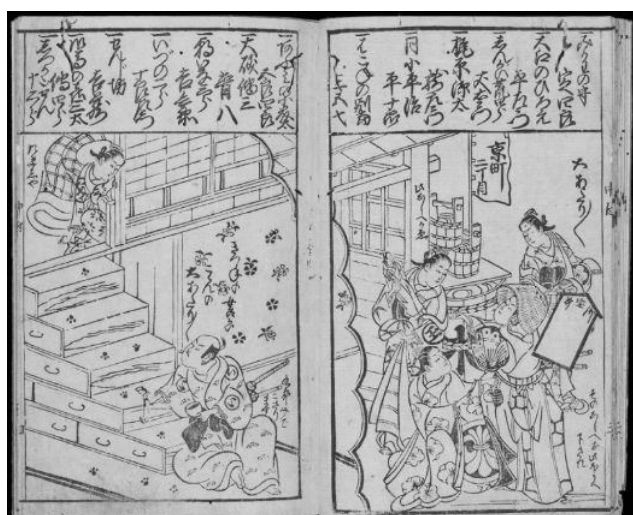
『武江年表』によると二月中旬、行徳浦（現・千葉縣市川市）に鯨二頭が流れ、両国橋の広場で見世物にしたという。しかし、二代目団十郎の日記では人々が鯨を見るために江戸から行徳浦に旅し、特に彼岸の日は賑わっていたとしている。同年三月三日（▽）の節句の発句として「行徳へ鯨の寄りし時の三月上己の序て潮干の発句す 馬刀かたやくしらの跡を三日の海」とあり、もし両国橋で見世物とされたとすれば、これよりも後であろう。

二月二十日には歌舞伎の筋を元にした書物が販売されたとする。

坂田金時は、山姥に育てられた源頼光の四天王の一人として説話集『今昔物語集』の他多くの伝説や物語に登場人物だ。近世初期では金平歌舞伎の主人公で、山姥にまつわる作品として近松門左衛門作『山姥』は有名である。

当時中村座で上演中だった「十八公今様皆我」の狐買いの趣向について、役者評判記『享保十九年江戸・大坂評判記』には次のように記されている。

狐の大じんとは神代此かたない図。（中略）二番めやはた／三郎役、九郎介と云大尽姿、なま多いの出犬がきらひで、やりてが抱し、ち



〔図3〕『享保十九甲寅年春狂言本』（ボストン美術館蔵）

お江戸の色事師芸功をへて鳥井をとびこへた妻恋稻荷
新四殿見顕され、てうちやくあい、本心云顕さるゝ所大々当り、
九郎介と成、狐ヲ見顕せしふり、狐と問答、一人して兩人の仕打、
の足にて狐の足跡、虎がへや迄付、亀ぎくあんど持来ゆへ、
のり、狐じやとまぎらかさるゝ所大当り、茶わんへ酒つぎ灰入、犬
やめさせん為、闇少将がへやへ行、あたまをさぐられ九郎介とな
れ犬の足を切落し、狐の足とにた物じやと云、十郎五郎が郭通ひを

【日記】

○廿三日歟四日ノ曉夢想 古人丈草^①カ古句ヲ思ヒ其句ヲ直スト夢ニ見
ル コハ口能夢想也

ホト、キス鳴ヤ爰デノ湖水坊^②

【注】

（1）**古人丈草** 寛文二（一六六二）年～元禄十七（一七〇四）年。

内藤氏。通称林右衛門。名は本常。別号仏幻庵、懶窩、無懷、
無辺、一風、太忘軒など。尾張 犬山藩士で、青年時には漢詩
を学び禅にも通じた。芭蕉に入門。数年で『猿蓑』などに発句
『日本大百科全書』。

（2）〈伊柿〉「丈草の句が 時鳥鳴くや湖水のそゝ濁り」

【解説】

二代目団十郎が蕉門俳人だった内藤林右衛門の発句を添削した夢を見
田という。句は『芭蕉庵小文庫』（史邦編、元禄九年刊）にある。

【日記】

○廿八日 芝居早ク過候様ニト名主^①ヨリ急度云ヒ来リ早ク過ス予^②

【注】

（1）**名主** 当時菅屋町の名主は山口小左衛門（『万世町鑑』享保十
八年六月刊、『江戸町鑑集成』収録）。

【解説】

葺屋町の名主が早く興行を終わらせるように命じた。興行は夜六つ(午後六時)までに終わるはずだったが、賑わっていたり、台本がまだできてなかったり、遅くなる場合もあった。なお、記録が途切れているため、この日の市村座の詳細は不明。

【日記】

▽近松門左衛門姓は杉森字は信盛平安堂巢林子享保九辰の十一月廿二日七十余歳にて死す

法名阿耨院穆矣日一具足居士

辞世^①

残れとはおもふもおろか埋火の

けぬまあたなる朽木かきして

右は今昔繰年代記^②に出 上下かな本

【注】

(1) **【辞世】**〈郡〉「この歌の外にもう一首ある。『それぞ辞世去ほどに

扱もそのうちに残る桜が花しにほは』」

(2) **【今昔繰年代記】**〈郡〉「繰は正しくは繰。享保十二年刊。西沢一風

著。人形浄るり史」

【解説】

浄瑠璃史書『今昔繰年代記』(享保十二(一七二七)年刊、『新群書類従』第四巻収録)の西沢一風の文章は以下の通り。

近松門左衛門は作者の氏神なり、年来作り出だせる浄るり百余番、

其内あたりあたらぬありといへども、素読するに何れかあしきはなし、今作者と云はるる人々、みな近松のいきかたを手本とし書きつゝる物也、此道を学ぶ輩、近松の像を絵書き、昼夜これを拝すべし、又あるまじき達人うやまひおそるべし、時に享保九辰年十一月廿二日、七十余才にして此世の見おさめ今は時残し給ふ辞世

近松門左衛門性は杉森、字名は信盛、平安堂巢林子、代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九卿につかへて咫尺奉げて寸罰なく市井に漂ひて商売知らず、隠に似て隠にあらず、賢にして賢ならず、物知りに似て何も知らず、世のまがひもの唐のやまとおしえ有る道農妓能雜隆滑芸の類迄知らぬ事場げに口にまかせ、筆にはしらせ、一生をさへづりちらし、今はの際にいふべきおもふべき、まことの一大事は一字半言もなき倒惑、心に心の耻^{はじ}をおもふて七十余りの光陰、おもへば無覺束我世経畢ぬ

若し辞世はと問ふ人あらば

夫れ辞世去る程に扱も其後の

残る桜か花しにほは、

入寂名阿耨院穆矣日一具足居士

不^レ俟^二終焉期^一自記

残れとはおもふもおろか埋火の

けぬまあたなる朽木かきして

二代目団十郎の追善行為については「詳解1」享保十九年正月二十四日の解説参照。

【日記】

○晦日 相州小田原回禄^①ノヨシ廿九日二宮ノ下奈良ヤ作兵衛^②江戸へ来ル由

【注】

(1)

相州小田原回禄

小田原城周辺の火災。「昨日相模国小田原火災あり。城下ことこの災にかゝるよし注進あり」『徳川実紀』

享保十九年三月一日。

(2)

二宮ノ下奈良ヤ作兵衛

小田原城の二宮（現・神奈川県小田原市）周辺の商人か。

【解説】

小田原宮ノ下周辺の商人奈良屋作兵衛が江戸に来て、先日の火事について二代目団十郎に語る。なお、『徳川実紀』によると火災は二月三十日に起き、三月一日に幕府に報告された。二代目団十郎は月日を間違っているのか。それとも、噂話などインフォーマルな情報の流れは幕府に届ける公の報告よりも早かったのか。